

## SPF 豚農場認定制度の進捗状況と問題点

日本SPF豚協会会長 赤池洋二

SPF豚農場認定制度について、日本SPF豚協会が実施する諸規則、基準を本誌第4号に紹介した。そこで今回はその後の進捗状況について報告する。

### 1. SPF豚農場認定委員会

SPF豚農場認定規則〔I〕第8章にしたがって、SPF豚農場認定委員会の委員を次のように決定した。(順不同、敬称略)

#### 1)学識経験者委員

波岡茂郎(北海道大学名誉教授)

新井 肇(東京農業大学)

志賀 彰(日本種豚登録協会)

高橋正也(日本養豚学会)

三村二雄(日本全業工業)

#### 2)各生産ピラミッド選出委員

宮内一典(ホクレン農協連)

大石隆一(伊藤忠飼料)

花岡秀昌(全農)

海老成直(住商飼料畜産)

椎名 廣(千葉県SPF豚協会)

村井金三(日本農産工業)

#### 3)日本SPF豚協会選出委員

赤池洋二(日本SPF豚協会会長)

高島保雄(日本SPF豚協会副会長)

#### 4)委員会事務局

日本SPF豚協会事務局内

### 2. SPF豚CM農場認定委員会

CM(コマーシャル)農場に対する認定委員会

は認定規則〔II〕第6章の規定にもとづいて各生産ピラミッド毎に設置され、すでに活動を開始している。

### 3. 認定証

SPF豚農場認定証用紙は印刷を終わり、認定作業が終了したところから順次発行できるよう準備を整えている。

### 4. SPF豚農場楯

SPF豚農場のシンボルとして大型の楯を製作することとし、希望者の注文に有料で応じることとした。楯にはSPF Swine Farmの文字と農場名を刻み込むことになっており、現在試作中である。

なお、SPF豚農場がその認定資格を取り消された場合や廃業する場合には、上記料金の一部を払い戻した上、楯を回収することとしている。

### 5. 認定制度発足に対するSPF豚農場の反応

1) SPF豚農場のうち、GGP、GP農場はSPF種豚を生産し、販売するのが主な役割であるから認定制度に加入することは当然のことであり、全ての農場がもろ手をあげて賛成している。

2) CM農場の大部分からは賛同を得ているが、一部には今まで認定制度無しでやってきたのに、何を今さらという意見がないでもない。しかし、SPF豚肉を少しでも高く売りたい、差別化販売したいと日頃願っているSPF豚農場経営者は、人と同じことをしていたのでは到底その願いは叶うべ

## SPF豚農場認定制度の進捗状況と問題点

くもないことを良く認識している。そこで今回の認定制度は絶好のチャンスであるとして積極的に参加を表明している。このような農場は、今までのやり方を総点検し、胸をはって認定申請にかかりたいとし、農場設備、防疫管理の見直しと再整備に取り組んでいる。これはとりもなおさず、我々SPF豚農場が襟を正すという意味で非常に重要なことであり、ひいてはパイヤーおよび消費者の正しい理解を得ることにつながるものである。

したがって、今年度中にかなりの数の認定農場が誕生する見込みである。本稿執筆中にすでに申請第一号が提出されている。

## 6. 当面の問題点

およそ3年間をかけて準備してきたSPF豚農場認定制度がようやく実施の時を迎えた。この間、SPF豚研究会、SPF豚協会、大学、研究機関その他関係各位のみなみなならぬご協力があったこそ、ここまでやってこれたと深く感謝申し上げたい。しかしながら、この認定制度の将来には数多くの問題が横たわっており、粘り強く解決していくしか方法がない。

1) 日本SPF豚協会は任意団体であり、資金力が乏しく専従職員がおけない状態である。認定制度をはじめとする今後の業務拡大を考えると、協会の将来の在り方について真剣に議論する時期にきていると思われる。

2) SPF養豚が、高品質の豚肉を効率よく生産することを目的としたもので、そこにSPFの技術と知識を活用した生産システムそのものであることが専門家の間でもまだ充分理解されているとはいえない。つまり、厳密な意味でのSpecific Pathogen Freeという学術用語へのこだわりから実験動物に

求められる基準を養豚の現場に当てはめようとするため、農場に飼養される豚がSPF豚であるかどうかを実験動物のレベルで議論されることになる。これでは現実味のない机上の論争になってしまう恐れがある。SPF養豚は、学術的に開発され、発展してきたSPF化動物の技術を養豚の現場にとりいれ、生産性向上に活用する生産システムに構築しなおしたものであるということを、日本SPF豚協会が辛抱強くPRしていく必要がある。

3) ヘルスチェック実施上の問題も簡単ではない。

① SPF豚農場認定のためのヘルスチェックとは畜場に出荷された肉豚の鼻甲介検査や内蔵検査の結果が大きな比重を占めるが、これらの検査に協力してくれると畜場が少なくなる傾向がある。

② と畜場で作業の邪魔にならないように、しかも手際よく検査を進めるためには人手が必要であり、旅費交通費、その他の費用がかかる。

③ 血清学的検査、細菌学的検査、ウイルス学的検査、組織学的検査などは専門家の知識と技術のほか、種々の検査機器や設備、高価な試薬類なども必要で、これらの費用を誰がどのような形で負担するのか、今後に残された大きな問題の一つである。

## 7. あるSPF豚生産者の力強い発言

SPF豚農場認定制度発足の説明会を開くうち、ある生産者から、今回の認定申請にまつわる色々な条件は認定制度に関係無しに本来自分の経営を守るために実施しておくべきものであって、多少の費用がかかっても当然である。これを機会に完璧に実施し、安心してSPF養豚経営を続けたいとの力強い発言があったことを最後に紹介しておきたい。